

講義年月日 2004年5月10日(月)

講演者 加藤 好郎氏(慶應義塾大学三田メディアセンター事務長)

テーマ 大学図書館におけるリーダーとは:ある事務長の経験に基づく声

講義内容

1. 自己紹介

図書館・情報学科の塾生の頃

catalogerの頃:1日25冊のノルマ

新図書館の頃(1982年):閲覧へ異動し、190万~200万冊の大移動の仕事をした。

早稲田大学との相互協力(慶応から依頼)を開始した

三井文庫:California大学Berkley校が買っていったが、目録をとることができずに、アメリカ政府から補助をうけて、目録作成をすることになった。そこで、加藤氏が行き、1年間で3000タイトルの目録をとった。

国際センターの頃:留学生10万人構想のころに3年間入試改革などの仕事をした

メディアセンター総務課長(1993年):リエンジニアリングの実施

メディアセンター事務長代理 事務次長 そして事務長へ

現在の役割:後継者の育成/社会貢献としての各種委員・役員等

2. 図書館のリーダーは誰

日米の図書館長の違い

日本=「教員の図書館長」 アメリカ=「図書館員のたたき上げ」

日本式のメリット:学内での発言力 デメリット:図書館の業務を知らない

3. 一般的なリーダーの条件とは

構想力を持つこと。ビジョンを部下に共通理解させる。

3割賛成 4割どちらでも 3割反対のときは、7割まで賛成を増やせばGOサイン

なりたいたい人とならせたい人。私欲と公益の調整をする。

改革への決断。経験と思い(夢) 理論と直感(勘) ==>判断ではなく、決断をする。

先見力。経験・情報・論理試行の訓練、集中力。

朝令暮改はリーダーの要件。成長している証である。

「難しいことを判りよく、判り易いことを面白く、面白いことを奥深く」

顔は正直。「40過ぎたら自分の顔に責任をもて。」(リンカーン)

よい参謀とイエスマン(側近):参謀はスタッフにおけ、ラインに置くと側近になりやすい。

謝れる勇氣。責任のある決断がそうさせる。

4. 大学図書館におけるリーダーとは

外とのつながり。現場からの発想。先輩図書館員との出会い(反面教師も受け入れる幅)。

資料との出会い。本物との出会いを大切にする。

パーキンソンの法則:審議時間と支出額は反比例。会議は終了時間から決める。

責任と権限を与えて干渉しない。主題専門家にするか、行政職にするか。

仮想の自分をいつももて:あの人ならきつとこう言い、きつとこうする。

5. スタッフにおくる言葉

代替案をもって、上司と議論するべし。上司は、部下の直言を聞くべし。

誉めるか励ますか、何しろ気を送る。元気、やる気、根気、勇氣。

忙しい人暇な人:難しい仕事は、忙しい人にふれ。

タスクフォースの重要性:これからは少数精鋭でプロジェクト単位で業務遂行。

図書館評論家「馬鹿不平多し」

6. さいごに皆様に

必ず毎日目標を持ちましょう。一日があつという間に過ぎたほうが楽しい。

「あーなりたい」と言われる人になりましょう。

自分にプライドを持ちましょう。子供の目に自分を映してみましょう。

いつも、利用者サービス最優先のスタンスを持って業務を遂行しましょう。